

男性の DV 被害認知プロセスと対処方略に関する研究

研究代表者

法政大学文学部 越智啓太

1, 問題

ドメスティックバイオレンスやデートバイオレンス(ハラスメントといわれているものも含める)についての公的な調査では、加害者は男性、被害者は女性であることが多いという結果が得られることが多い。例えば、内閣府男女共同参画局は、数年毎に男女間における暴力に関する調査を行い報告を行っているが、その最新版においては、被害経験の性差が報告されており、女性の 1 / 3、男性の 1 / 5 が配偶者から暴力を受けたことがあり、女性の 7 人に一人が、何度も暴力を受けているとしている(内閣府, 2015, 2018)。静岡市生活文化局市民生活部男女参画・市民協働推進課が 2013 年に行った調査では、男性の 28.5 % が配偶者(妻)から暴力を受けたことがあり、女性ではじつに 46.5 % が配偶者(夫)から暴力を受けたことがあった。

また、デートバイオレンスに関しては、平成 20 年度に横浜市市民活力推進局が行ったデート DV についての意識・実態調査においては、女性は 26.7 %、男性では 14.9 % が何らかの被害に遭っていることが報告されており、やはり、女性の方が被害経験の割合が高い。このようなことから多くの啓蒙書、報告書、論文等においては、ドメスティックバイオレンス、デートバイオレンスが基本的には男性から女性の方向で行われるものとして記載されている。

ところが近年、これとは異なるような報告がなされることも多くなってきた。たとえば、2016 年 2 月 7 日の毎日新聞の記事によれば、大阪府の高校生グループが、府内の 1000 人の中高校生を対象にデート DV についてのアンケート調査を行ったところ、男子生徒が彼女から暴力を受けた経験は全体の 33 % に見られたのに対し、女子生徒が彼氏から暴力を受けた経験は、12 % に過ぎず、男子生徒の被害の方が倍以上多かったという。

越智らのグループ(2014,2015,2016)は、未婚の男女を調査対象者として継続的にデートバイオレンス・ハラスメントに関する調査を行っている。この調査は被害者調査であるが、この調査においても男性の被害率は女性の被害率よりも多くの場合高くなっている。

これらの結果を見ると、ドメスティックバイオレンスやデートバイオレンスの性差については、その調査方法や調査項目によって大きく異なっている可能性があることがわかる。例えば、女性の方が高い被害率を示している調査の多くは、「あなたは DV の被害に遭っていますか」などの抽象的な質問がなされることが多いのに対して、男性の方が高い被害率を示している調査や男女差が見

られない調査の多くは「あなたの交際相手は、あなたの前で壁などを思い切りたたくことがありますか」などの非常に具体的な質問項目になっていることが多い。

これは、実際には男女間における暴力が、男性、女性と変わらない頻度で起きているか、むしろ、男性の方が多く被害に遭っているにもかかわらず、男性の場合、自分が受けている暴力やハラスメントを「DV」であるということを認知せず、「自分がDV被害者」だとは思わないという可能性を示しているのかもしれない。

このような認知の偏り、歪みによって、男性が被害を受けている場合、DVは、発覚しにくく、かつ、公的な機関などによる、さまざまな支援がしにくい可能性がある。そこで、本研究では、ドメスティックバイオレンス、デートバイオレンスの性差について、より詳細に調査するとともに、男性は自分が受けている行為について、それをどのように「バイオレンス・ハラスメント」だと認知するのかについて明らかにしてみたいと思う。

2, 方法

調査方法の対象

本調査は、デートバイオレンスに関して行うことにする。ドメスティックバイオレンスが配偶者や同居者からのバイオレンス・ハラスメントなのに対して、デートバイオレンスは交際中の相手からのバイオレンス・ハラスメントのことで、対象者は未婚となる。本調査でデートバイオレンスを扱ったのは、ドメスティックバイオレンスに比べて、実証的なデータが少ないこと、ドメスティックバイオレンスに対して「嫌なら別れればいだけ」として軽く認知されていて（しかし、その被害はドメスティックバイオレンスに匹敵することがわかっている）予防対策や研究も少ないからである。なお、本調査は異性間カップルを中心に行われている。もちろん、同性間カップルにおけるデートバイオレンス・ハラスメントの研究も必要であるが、現状では調査サンプルを十分に集めることが難しいため、異性間カップルを対象とした。

デートバイオレンス・ハラスメントについての調査項目

調査対象者にはまず、その基本的な属性（年齢、性別、学歴等）を尋ね、引き続きデートバイオレンスについての調査項目に回答させた。本調査の目的の一つが質問項目によってドメスティックバイオレンスの頻度などが異なって報告されてしまう現象を明らかにすることであるので、ここでは、2種類の方法でその頻度について報告させた。最初の方法は直接的な質問で、「あなたはいままでに交際相手から身体的な暴力や虐待を受けたことがありますか（はい・いいえ）」という二者択一の質問形式であった。この方法で、主要4種類の暴力形式、すなわち、身体的、性的、心理的、経済的な暴力についてそれぞれ質問した。それにくわえ、「あなたはいままでに交際相手からデートバイオレンスを受けたことがありますか（はい・いいえ）」というデートバイオレンス全体について直接質問するものも使用した。本報告書ではこの回答をDV認知と呼ぶことにする。

次にデートバイオレンス・ハラスメントで行われる個々の行為の頻度を測定する尺度であるデー

トバイオレンス・ハラスメント尺度（越智ら 2014,2015,2016）を実施した。この尺度は、直接的暴力、間接的暴力、支配監視、言語的暴力、性的暴力、経済的暴力、つきまとい・ストーキングの7つの尺度から構成されるもので、「相手に顔面を平手で打たれたことがある（直接的暴力）」、「殴るそぶりや、ものを投げつけるふりをして脅されたことがある（間接的暴力）」、「頻繁に電話やメールをされて、自分が誰に会っているのかや自分の行動を確認されたことがある（支配監視）」などの具体的行動の頻度について「まったくない」から「よくある」まで5段階で評定するものである。前者の尺度がDVに関する認知についての尺度なのに対して、この尺度はDVの個々の行動の生起頻度について評価する尺度になっている。また、それぞれの尺度においてDVが見られた場合には、そのときの恐怖度、不安度を7段階で評定させたほか、対処方法（注意する・説得する、逃げる、無視する・距離を置く、反撃する・いやがらせをする、特に何もしないの5つから一つ選択させる）とその対処によってDV状況がどのように変化したかについて「事態は非常に改善する」から「事態はひどく悪化する」までの7段階で評定させた。

これら2種類のデートバイオレンス・ハラスメントについての尺度項目は互いの影響を最小限にするために離れた位置に配置した。つまり、最初の直接的な質問は質問票の最初の部分に、2番目のデートバイオレンス・ハラスメント尺度は質問票の最後の部分に配置した。

パーソナリティについての質問項目

また、本研究の目的はデートバイオレンス・ハラスメントの認知が男女、あるいは質問項目間で異なっている原因について明らかにすることであるので、これらの判断と関連していると思われるさまざまな変数についても測定を行った。用いたのは以下の尺度である（尺度の詳細は結果、考察の部分で述べる）。日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)、自尊感情尺度、自己嫌悪感尺度、自己主張性尺度、伝統的な男性役割態度尺度（ほかにこの報告書では分析の対象外であるが、日本版ラブウェイ尺度、怒り反芻尺度）。

調査参加者と手続き

あらかじめ調査会社のデータベースに登録されている調査協力候補者の中から、現在異性と交際している全国の18歳～29歳までの未婚の男女1800名（男性900名、女性900名）を調査対象としてウェブ調査を行った。調査に関する概要説明、データの使用方法などについての説明文書を呈示し、調査対象となることに同意したもののみに対して調査を行った。調査は2019年12月に（株）クロス・マーケティングに委託して行った。回答はおおむね5～15分程度で行われた。参加者はこの調査に回答することでのちに商品などと交換することが出来る一定のポイントを得ることが出来た。

調査対象者の基本的な属性とその性差

分析対象者の平均年齢は、24.22歳(3.212)〔()内は標準偏差〕、男性24.12歳(3.315)、女性24.32歳(3.104)であった。いままでの交際人数は、男性3.45人(4.121)、女性3.66人(3.805)、交際期間

は、男性 3.60 年(3.055)、女性 4.07 年(3.280)であった。それぞれの値について差があるかどうかを t 検定によって検定したところ、年齢については $t(1798)=-1.306, p=0.192$ 、交際人数については、 $t(1798)=-1.117, p=0.264$ 、交際期間については $t(1798)=-3.183, p=.001$ となり、年齢と過去の交際人数については性差はなかったものの、交際期間については、女性の方がやや長かった。

3、結果と考察

3-1) DV 被害と認知の性差に関する分析

DV 被害についての直接的な質問に関する分析

まず、「あなたはいままでに交際相手から身体的な（性的な、心理的な、経済的な）暴力や虐待をうけたことがありますか」という直接的な質問に対する回答について集計した。これは、公的な DV に関するアンケート調査でしばしば用いられる質問形式である。その結果、身体的 DV は、男性の 4.3%、女性の 10.2%が経験あり、性的 DV については男性の 2.1%、女性の 6.4%が経験あり、心理的 DV については男性の 11.0%、女性の 19.3%が経験あり、経済的 DV については男性の 6.0%、女性の 6.0%が経験ありと答えた。一般的に「デートバイオレンスを受けたことがあるか」という質問については、男性の 5.2%、女性の 6.8%がありと答えた。

Table 1 デートバイオレンスの被害者かどうかを直接質問した場合の肯定的回答の性差

	身体的	性的	心理的	経済的	DV
男性	4.3%	2.1%	11.0%	6.0%	5.2%
女性	10.2%	6.4%	19.3%	6.0%	6.8%
有意差	**	**	**	ns	**

注) ** $p<.01$; ns not significant

以上の結果についてクロス集計の χ^2 検定と評定値の等分散を仮定しない t 検定を行った。その結果、身体的 DV については、 $t(1573.549)=4.873, p \doteq 0.000$ 、性的 DV については、 $t(1450.490)=4.566, p<0.000$ 、心理的 DV については、 $t(1708.636)=4.959, p \doteq 0.000$ 、経済的 DV については、 $t(1798.000)=0.000, p=1.000$ で、経済的 DV を除くすべてのデートバイオレンスの形式で、男性よりも女性が被害を受けたと報告することが示された。デート DV をうけたことがあるかという包括的な質問については、 $t(1788.111)=0.874, p=0.080$ でわずかに女性の方が多く被害を受けたと報告した。

以上のデータは従来 of 公的機関で行われた社会調査と数字的にもほぼ同様であり、これよりこの質問形式で質問した場合の従来 of 調査結果との整合性が示された。

興味深いのは、身体的、性的、心理的、経済的のいずれかの虐待を受けたかという質問に対して、「イエス」と回答しているにもかかわらず、より包括的な質問である DV をうけたことがあるかという質問に対して、「ノー」と答えているものが少なからず存在した点である。とくに心理的 DV についてはこの解離が大きく、女性の 19.3% が心理的 DV をうけたと報告しているにもかかわらず、デートバイオレンスを受けたことがあるという質問に対しては、6.8% しか、イエスと答えていない。これは個々のタイプの暴力や虐待を受けたからといって、それがそのままデートバイオレンスの被害の認知に結びつくわけでないということを示している。そこで、次に個々のタイプの暴力、虐待を受けたか否かと、包括的な概念であるデートバイオレンスを受けたことがあるのかというものの関連について、相関係数を算出してみた。その結果を以下に示す。

Table 2 「デートバイオレンス被害」とそれぞれのバイオレンス被害の相関

	身体的 DV	性的 DV	心理的 DV	経済的 DV
男女込み	0.298**	0.296**	0.452**	0.311**
男性のみ	0.275**	0.262**	0.415**	0.419**
女性のみ	0.318**	0.325**	0.484**	0.211**

注) ** $p < .01$; ns not significant

興味深いことに、もっとも相関が高いのは男女込みのデータでは、心理的な DV であった。また、男性が被害者の場合には、経済的 DV の相関が高く、女性が被害者の場合には、心理的 DV が際だって高かった。従来のイメージと異なり現代では心理的な DV が DV の代表的なものとなっていることが示された。なお、デートバイオレンスを受けたことがあるかの回答を従属変数とし、個々の DV 項目を独立変数として重回帰分析を行ったところ、重回帰係数は $R=0.495$ ($p < .01$) となった。さらに、同様な独立変数、従属変数で二項ロジスティック回帰分析を行ったところ、全ケースの 94.0% を適切に分類する関数が算出された。その B とオッズ比を以下に示す。心理的 DV が最も大きな値を示していることがわかる。

Table 3 それぞれの DV 項目を独立変数とした場合のロジスティック回帰分析結果

変数	B	標準誤差	Exp(B)
身体的 DV	0.106	.288	1.112
性的 DV	1.254	.326	3.505
心理的 DV	2.898	.270	18.132

経済的 DV	0.720	.279	2.054
定数	-5.785	.693	0.003

注 1) 従属変数は「デートバイオレンスを受けたことがありますか」についての回答、独立変数は各 DV を受けたことがあるかについての回答で、いずれも二値である。

注 2) 分析は強制投入法で行われ、身体的 DV を除く変数が $p < .01$ で有意となった。

デートバイオレンス・ハラスメント尺度に関する分析

次に越智らのデートバイオレンス・ハラスメント尺度を使用して、具体的な行動頻度の性差について分析した。この尺度は7つの下位尺度から構成されており、数字が大きくなるほど程度や頻度が大きくなることを意味している。上記の尺度が、それぞれの DV の被害を受けたことがあるのかをイエス、ノーの二択で答えるのに対し、本尺度はそれらの DV の度合いを5段階でチェックさせるものである。

集計の結果、直接的暴力については男性 1.43(.852)、女性 1.32(.760) [() 内は標準偏差]、間接的暴力については男性 1.44(.801)、女性 1.46(.882)、支配監視については男性 1.71(.971)、女性 1.65(1.00)、言語的暴力については男性 1.53(.836)、女性 1.66(.963)、性的暴力については、男性 1.31(.708)、女性 1.46(.780)、経済的暴力に関しては男性 1.46(.856)、女性 1.38(.774)、つきまとい・ストーキングについては、男性 1.41(.790)、女性 1.34(.702)となった。

等分散を仮定しない t 検定の結果、直接的暴力に関しては、 $t(1775.062)=2.967$, $p=.003$ で男性の方が被害に遭っていることが多く、間接的暴力に関しては、 $t(1781.504)=-0.459$, $p=0.646$ で男女に差が見られず、支配監視については $t(1796.496)=1.392$, $p=0.164$ で男女に差が見られず、言語的暴力に関しては、 $t(1762.873)=-3.047$, $p=0.002$ で女性の方が被害に遭っており、性的暴力に関しては $t(1781.566)=-4.190$, $p < .000$ で女性の方が被害に遭っており、経済的暴力に関しては $t(1779.908)=2.167$, $p=.030$ で男性の方が被害に遭っており、つきまとい・ストーキングに関しては、 $t(1773.519)=1.950$, $p=.035$ で男性の方が被害に遭っているということがわかった。

つまり、直接的暴力、経済的暴力、ストーキングについては女性よりも男性が被害を受けており、間接的暴力、支配監視は男女で差がなく、言語的暴力と性的暴力では女性の方が被害を受けているという結果になった。

Table 4 デートバイオレンス・ハラスメント尺度の性差

	直接的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
男性	1.43	1.44	1.71	1.53	1.31	1.46	1.41
女性	1.32	1.46	1.65	1.66	1.46	1.38	1.34
有意差	*	ns	ns	**	**	*	*

注 1) 数字が大きいほど被害を受けているということを意味する

注 2) * $p < .05$; ** $p < .01$; ns not significant

注 3) 太字の得点は有意に高いことを示している

なお、デートバイオレンスをうけたことがあるかの回答を従属変数とし、個々のデートバイオレンス・ハラスメント尺度得点を独立変数として重回帰分析を行ったところ、重回帰係数は $R=0.373$ ($p < .01$) となった。さらに、同様な独立変数、従属変数で二項ロジスティック回帰分析を行ったところ、全ケースの 93.8 % を適切に分類する関数が算出された。その B とオッズ比を以下に示す。支配監視と言語的暴力などの心理的 DV がデートバイオレンスと認知されるかどうかにも最も大きく関連していることがわかる。

Table 5 デートバイオレンス・ハラスメント尺度の各項目を独立変数とした場合のロジスティック回帰分析結果

変数	B	標準誤差	Exp(B)	有意差
直接的暴力	0.269	.157	1.309	+
間接的暴力	-0.331	.164	0.718	*
支配監視	-0.402	.121	0.669	**
言語的暴力	-0.505	.149	0.604	**
性的暴力	-0.019	.158	0.981	ns
経済的暴力	-0.049	.139	0.953	ns
つきまとい	-0.185	.165	0.831	ns
定数	5.195	.270	180.454	**

注 1) 従属変数は「デートバイオレンスを受けたことがありますか」についての回答

注 2) + $p < .1$; * $p < .05$; ** $p < .01$

デートバイオレンス・ハラスメント尺度と DV 認知の関連 (相関)

デートバイオレンス・ハラスメント尺度と直接的な DV 認知の間にはどのような関連があるのだろうか。もちろん、尺度値が高い場合に DV を受けたと評価されると思われるが、その相関はどのくらいか、また、男女差はあるのだろうか。この点を分析した結果を Table 6,7 にあげる。Table 6 は、このうち、身体的 DV、性的 DV、経済的 DV についての回答とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の得点の相関を Table 7 は、心理的 DV についての回答とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の得点の相関を示している。身体的 DV に対応するのは、デートバイオレンス・ハラスメン

ト尺度では直接的暴力と間接的暴力の2つの尺度、心理的 DV に対応するのは、デートバイオレンス・ハラスメント尺度では支配監視、言語的暴力、つきまとい・ストーキングの3つの尺度である。当然ながら、これらには高い相関はあるが、興味深いのは身体的 DV と性的 DV、心理的 DV については、いずれも男性に比べて女性の方が相関が高いという点である。これは女性は直接の被害行為と DV 認知の間に密接な関係があるのに対して、男性ではこの関係が明確ではなくなるということを示している。

Table 6 デートバイオレンス・ハラスメント尺度得点と直接評定の相関（その1）

	身体的		性的	経済的
	直接的	間接的	性的	経済的
男女込み	-.413**	-.520**	-.442**	-.457**
男性のみ	-.345**	-.381**	-.354**	-.459**
女性のみ	-.509**	-.617**	-.495**	-.458**

注) **p<.01

Table 7 デートバイオレンス・ハラスメント尺度得点と直接評定の相関（その2）

	支配監視	心理的 言語的	つきまとい
	男女込み	-.424**	-.480**
男性のみ	-.363**	-.379**	-.343**
女性のみ	-.487**	-.544**	-.418**

注) **p<.01

デートバイオレンス・ハラスメント尺度と DV 認知の関連（閾値）

つぎに直接評定で虐待が「ない」と答えたものについて、デートバイオレンス・ハラスメント尺度の平均得点とその男女差を示す。この値は、どの程度のデートバイオレンス・ハラスメント尺度得点であれば、虐待なしと判断するかについての目安を示している。この男女差について検定してみたところ、身体的暴力なしと判断したものの平均得点は、デートバイオレンス・ハラスメント尺度の直接的暴力、間接的暴力で男性の方が有意に高く、また、経済的暴力でも同様の傾向が見られた。また、心理的暴力に関しては、支配監視とつきまとい・ストーキングに関しては男性の方が有

意に高かったが、言語的暴力については有意な差は見られなかった。ここで有意差が見られたものについては、女性の方がその行為を「虐待」であると判断する閾値が低いことを意味している。たとえば、同じ程度の直接的暴力であっても、女性の場合、それを身体的虐待であると判断するのに対して、男性はそれを身体的虐待であると判断しない場合があることを示している。ただし、性的虐待についてはこの傾向が逆になった。つまり、同じ行為の程度であっても、男性はそれを性的虐待と捉え、女性はそれを性的虐待であると捉えない場合があることを示している。

Table 8 直接評定で「DVなし」と認知したもののDV尺度得点の男女差

	男性	女性	有意差
身体的暴力	n=861	n=808	
直接的暴力	1.37 (0.785)	1.19 (0.593)	**
間接的暴力	1.38 (0.727)	1.28 (0.623)	**
性的暴力	n=881	n=842	
性的暴力	1.28 (0.649)	1.36 (0.654)	*
経済的暴力	n=846	n=846	
経済的暴力	1.36 (0.731)	1.29 (0.631)	*
心理的暴力	n=801	n=726	
支配監視	1.59 (0.864)	1.41 (0.727)	**
言語的暴力	1.42 (0.736)	1.40 (0.689)	ns
つきまとい	1.32 (0.685)	1.20 (0.498)	**

注1) () は標準偏差

注2) * $p < .05$; ** $p < .01$; ns not significant

注3) 太字の得点は有意に高いことを示している

DV被害と認知の性差に関する分析のまとめ

上記の結果は、以下のようにまとめられる。① DV調査においては質問形式が結果を大きく左右する。DVがあったかどうかを直接聞く場合とDVの程度や頻度について具体的に質問していく場合には、その性差やパターンが大きく異なってしまふ。②一般にDVの有無について直接質問すると、女性のほうが男性よりもより被害に遭っているような結果となるが、DVの程度や頻度について具体的に質問していくと、その男女差は消失するか、場合によっては男性のほうが多くの被害を受けているという結果となる。③実際に受けているDVの度合いとそれがDVであると認知する程度は男性よりも女性のほうが高く相関している、④一般に同じ程度のDVを受けていてもそれをDVであると認知する閾値は女性よりも男性のほうが高い。ただし、性的虐待に関してはこの関係

が逆になる。

3-2) DV 認知を規定する要因とその性差

身体的 DV 認知を規定する要因とその性差

身体的 DV の有無を従属変数とし、デートバイオレンス・ハラスメント尺度の各因子の得点を独立変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。変数の選択は尤度比を用いたステップワイズ変数増加法によって行った。有意確率 $p < .05$ で変数を採択した。はじめに男女込みにしたデータについて分析を行い、次に男女別々に分析を行った。各ロジスティック回帰式の B の値を Table 9 に示す。この表を見ても明らかなように、身体的 DV 認知は直接的暴力、間接的暴力意外にも支配監視や言語的暴力の影響を受けていることがわかった。ただし、女性の場合はこの認知はもっぱら直接的、間接的暴力に依存し、男性の場合にはそれに加えて支配監視が加わるという傾向であった。興味深いのは性的暴力が身体的暴力認知にマイナスの影響を与えること、つまり性的な暴力があると身体的暴力と認知しにくいという傾向が男性に見られた点である。女性からの性的な強制がなされた場合、男性はそれに付随して暴力が発生してもそれをデートバイオレンスとは認知しないという可能性を示しているのかもしれない。

Table 9 身体的 DV の有無判断に及ぼす各種行動の影響

	男女込み	男性	女性
直接的暴力	.439	.693	.589
間接的暴力	1.135	.555	1.590
支配監視	.320	.225	
言語的暴力	.406		
性的暴力	-.390	-.988	
経済的暴力	-.365	.832	-.464
つきまとい			
Nagalkerke R 二乗	.424	.382	.499
正分類率	93.9	96.2	92.2

注 1) いずれの変数も $p < .05$, 空欄は採択されなかった変数

注 2) わかりやすくするために実際の分析結果と符号を逆転させて表示している。プラスは認知を促進することを意味し、マイナスは抑制することを意味する。

性的 DV 認知を規定する要因とその性差

性的 DV の有無を従属変数とし、デートバイオレンス・ハラスメント尺度の各因子の得点を独立変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。変数の選択は尤度比を用いたステップワイズ変数増加法によって行った。有意確率 $p < .05$ で変数を採択した。はじめに男女込みにしたデータについて分析を行い、次に男女別々に分析を行った。各ロジスティック回帰式の B の値を以下の Table 10 に示す。以下の表を見れば明確なように性的 DV の認知は性的な暴力の有無が主に規定している。ただ女性の場合はそれに加えて直接的な暴力が関係していた。男性から女性への暴力は性的な攻撃を含んでいる可能性を示している。

Table 10 性的 DV の有無判断に及ぼす各種行動の影響

	男女込み	男性	女性
直接的暴力			.468
間接的暴力	.460		
性的暴力	1.515	1.491	1.430
経済的暴力	-.388		
Nagalkerke R 二乗	.371	.319	.408
正分類率	96.0	98.0	94.1

注 1) いずれの変数も $p < .05$, 空欄は採択されなかった変数

注 2) わかりやすくするために実際の分析結果と符号を逆転させて表示している。プラスは認知を促進することを意味し、マイナスは抑制することを意味する。

心理的 DV の認知を規定する要因とその性差

心理的 DV の有無を従属変数とし、デートバイオレンス・ハラスメント尺度の各因子の得点を独立変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。変数の選択は尤度比を用いたステップワイズ変数増加法によって行った。有意確率 $p < .05$ で変数を採択した。はじめに男女込みにしたデータについて分析を行い、次に男女別々に分析を行った。各ロジスティック回帰式の B の値を以下の Table 11 に示す。男性の DV 認知には、支配監視と言語的暴力が影響しており、女性の DV 認知は間接的暴力がもっとも大きな影響を与えており、それに支配監視と言語的暴力が続いていた。また、興味深いことに男女ともつきまとい・ストーキングは心理的 DV の認知とは関連していなかった。つきまとい・ストーキングは心理的 DV と捉えられないことを意味している。加えて、女性の場合は、身体的暴力が生じている場合、心理的 DV 認知が抑制されるという傾向が見られた。これは、女性の場合、心理的暴力という言葉が「暴力的な行為は行われていないが、それ以外のバイオレンス・ハ

ラスメントが行われている」と認知されていることを意味する。

Table 11 心理的 DV の有無判断に及ぼす各種行動の影響

	男女込み	男性	女性
直接的暴力	-.645		-.720
間接的暴力	.802		.978
支配監視	.432	.589	.487
言語的暴力	.761	.654	.790
Nagalkerke R 二乗	.362	.247	.444
正分類率	87.1	89.0	86.6

注 1) いずれの変数も $p < .05$, 空欄は採択されなかった変数

注 2) わかりやすくするために実際の分析結果と符号を逆転させて表示している。プラスは認知を促進することを意味し、マイナスは抑制することを意味する。

経済的 DV の認知を規定する要因とその性差

経済的 DV の有無を従属変数とし、デートバイオレンス・ハラスメント尺度の各因子の得点を独立変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。変数の選択は尤度比を用いたステップワイズ変数増加法によって行った。有意確率 $p < .05$ で変数を採択した。はじめに男女込みにしたデータについて分析を行い、次に男女別々に分析を行った。各ロジスティック回帰式の B の値を以下の Table 12 に示す。経済的暴力の認知構造は比較的シンプルであり、経済的なハラスメント行為によって主に規定されていた。女性の場合、それに加え間接的暴力が加わるが、これは男性が女性に対して経済的暴力を行う場合には、間接的な暴力を伴うことが多いのを反映しているのかもしれない。

Table 12 経済的 DV の有無判断に及ぼす各種行動の影響

	男女込み	男性	女性
間接的暴力	.509		.538
支配監視	.278		
性的暴力	-.405		
経済的暴力	1.049	1.340	.934

Nagalkerke R 二乗	.351	.338	.334
正分類率	94.4	94.6	94.6

注 1) いずれの変数も $p < .05$, 空欄は採択されなかった変数

注 2) わかりやすくするために実際の分析結果と符号を逆転させて表示している。プラスは認知を促進することを意味し、マイナスは抑制することを意味する。

デートバイオレンス認知を規定する要因とその性差

デートバイオレンス一般の有無を従属変数とし、デートバイオレンス・ハラスメント尺度の各因子の得点を独立変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。変数の選択は尤度比を用いたステップワイズ変数増加法によって行った。有意確率 $p < .05$ で変数を採択した。はじめに男女込みにしたデータについて分析を行い、次に男女別々に分析を行った。各ロジスティック回帰式の B の値を以下の Table 13 に示す。

デートバイオレンスという言葉はもちろん、身体的、性的、心理的、経済的暴力のすべてを包括した概念である。そのため、これらのすべてのバイオレンス・ハラスメントの形態と関連することが予想された。しかし、実際には、男性の場合、支配監視とつきまとい、女性の場合、支配監視と言語的暴力のみが関連しているという結果になった。これは、「デートバイオレンス」という言葉が、支配監視やつきまといなどの心理的なバイオレンス・ハラスメントと類似の概念として理解されていることを意味している。つまり、多くのものは直接的暴力や間接的暴力、それに経済的暴力は「デートバイオレンス」という概念から外れるということの意味しているのかもしれない。

Table 13 デートバイオレンスの有無判断に及ぼす各種行動の影響

	男女込み	男性	女性
支配監視	.518	.553	.471
言語的暴力	.666		.714
つきまとい		.635	
Nagalkerke R 二乗	.237	.213	.262
正分類率	93.6	94.1	93.1

注 1) いずれの変数も $p < .05$, 空欄は採択されなかった変数

注 2) わかりやすくするために実際の分析結果と符号を逆転させて表示している。プラスは認知を促進することを意味し、マイナスは抑制することを意味する。

DV 認知を規定する要因とその性差のまとめ

本項では、DV 認知を規定する要因を明らかにするために、身体的、性的、心理的、経済的 DV 認知、それに「デートバイオレンス」自体についての DV 認知を規定する要因について、実際のデートバイオレンス・ハラスメント行為頻度との関連で調査してみるとともにその性差について検討してみた。多くの研究者や行政担当者の暗黙的な理解では、直接的暴力と間接的暴力が「身体的 DV」、性的暴力が「性的 DV」、支配監視、言語的暴力、つきまとい・ストーキングが「心理的 DV」、経済的暴力が「経済的 DV」、これらすべての暴力の頻度が「デートバイオレンス」認知を規定すると思われるが。実際にはそうになっていなかった。

本項でわかったことをまとめてみると以下のようなになる。①身体的 DV は女性の場合、直接的暴力よりも間接的暴力と関連する。②身体的 DV は、男性被害者の場合、身体的 DV には支配監視暴力が含まれる。③性的 DV は女性の場合、直接的暴力とも関連する。つまり、男性の直接的暴力は性的なものに関連する場合がある。④心理的 DV の認知を構成するのは支配監視と言語的暴力、女性被害者の場合、それに加えて間接的暴力であり、つきまとい・ストーキングは男女とも関連しない。⑤経済的 DV 認知に関しては経済的暴力とほぼそのまま関連している。⑥デートバイオレンスについての認知はすべてのタイプの暴力と関連しているのではなく、支配監視や言語的暴力と関連していた。これは「デートバイオレンス」という言葉が直接的な暴力よりも心理的な暴力に近いイメージを持っていることを示している。

3-3) パーソナリティとデートバイオレンス認知の関連

日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) の記述統計

本節では、パーソナリティとデートバイオレンス・ハラスメントの認知の関連について検討する。DV 認知の性差がパーソナリティの性差に起因している可能性について調査するためである。パーソナリティ尺度として現在最もポピュラーなものは、5 因子性格検査の系統に属するものである。この系統に属する性格検査が現在何種類か公刊されているが、いずれも項目数が比較的多く使いにくい。ただし、近年では5 因子性格検査の因子構造や特徴を維持したままで項目を縮約した短縮版尺度がいくつか公刊されている。本研究ではその中でもわが国で標準化された性格検査である日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 検査 (小塩・阿部, 2012) を使用することにした。この性格検査は5 因子がそれぞれ2 項目ずつ、計10 項目から構成されており、一方が逆転項目となっている。「活発で外向的である (外向性)」、「人に気を遣う優しい人間だと思う (協調性)」、「しっかりしていて自分に厳しいと思う (勤勉性)」、「心配性でうろたえやすいと思う (神経質傾向)」、「新しいことが好きで、変わった考えを持つと思う (開放性)」などの項目からなる。本研究では、自分のパーソナリティについて、全く違うと思う～強くそう思うまで7 段階で評定させた。以下に平均点と性差を示す。

Table 14 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) の記述統計と性差

	男性	女性	有意差
外向性	7.31 (2.633)	7.50 (2.882)	ns
協調性	6.47 (2.280)	6.48 (2.283)	ns
勤勉性	7.50 (2.465)	7.25 (2.488)	*
神経質傾向	8.19 (2.414)	8.96 (2.484)	**
開放性	8.22 (2.349)	7.72 (2.465)	**

注 1) 男性女性とも n=900

注 2) *p<.05; **p<.01; ns not significant

Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) の性差と DV 認知の関連についての仮説

DV の被害の認知と関連している可能性がある性格要因としては、神経質傾向が考えられる。同じ程度のデートバイオレンス・ハラスメント被害であっても神経質傾向が大きいとそれを「デートバイオレンスである」と認知しやすくなる可能性があると思われる。上記の Table を見てみると、確かに女性は神経質傾向が高く、これが DV 認知に影響しているという仮説と一致している。そこで、以下でより詳細にこの点について検討してみることにしたい。

Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) の性差と DV 認知の関連についての分析

DV の被害認知と 5 因子性格検査の得点の関係について、各 DV 項目ごとに集計してみた。結果を以下の Table 15 に示す。DV 被害があるとしたものとないとしたものに分けて、それぞれについて 5 因子性格検査の平均得点を算出し、差があるかどうかについて t 検定を行った。その結果、いくつかの項目において、DV 被害認知と Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) の間に関連が見られた。まず、身体的 DV については、外向性、協調性、神経質傾向、開放性が高いほど、DV 被害が申告された。性的 DV については、協調性と神経質傾向が心理的 DV については、外向性、神経質傾向、開放性が、経済的 DV については開放性が有意になり、それぞれの尺度の得点が高いほど DV 被害が申告されることがわかった。最後にデートバイオレンス全体についての申告については開放性のみに差が見られた。

当初の仮説通り、神経質傾向は多くの DV 認知と関連を持っており、神経質傾向が大きいほど、DV の被害を受けていると報告されやすいということが示された。ほかには予測されたものではなかったものの開放性が高いほど DV 認知がされやすいということが示された。

Table 15 各 DV の有無と性格の関連

身体的 DV	あり	なし	有意差
--------	----	----	-----

人数	131	1669	
外向性	7.98	7.36	*
協調性	6.98	6.44	**
勤勉性	7.48	7.37	ns
神経質傾向	9.10	8.54	*
開放性	8.48	7.93	*
性的 DV	あり	なし	有意差
人数	77	1723	
外向性	7.27	7.41	ns
協調性	7.08	6.45	*
勤勉性	7.52	7.37	ns
神経質傾向	9.36	8.54	**
開放性	8.25	7.96	ns
心理的 DV	あり	なし	有意差
人数	273	1527	
外向性	7.80	7.33	*
協調性	6.60	6.45	ns
勤勉性	7.47	7.36	ns
神経質傾向	9.08	8.49	**
開放性	8.55	7.87	**
経済的 DV	あり	なし	有意差
人数	108	1692	
外向性	7.50	7.40	ns
協調性	6.80	6.46	ns
勤勉性	7.54	7.37	ns
神経質傾向	8.90	8.56	ns
開放性	8.49	7.94	*
デートバイオレンス	あり	なし	有意差
人数	113	1687	
外向性	7.78	7.38	ns
協調性	6.77	6.46	ns
勤勉性	7.42	7.37	ns
神経質傾向	8.88	8.56	ns
開放性	8.63	7.93	**

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

デートバイオレンス・ハラスメント尺度と Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) の関連

前節の分析は、DVの被害を受けたかどうかの認知と Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) の得点、とくに神経質傾向との関連について明らかにした。つぎにこのような DV 認知が実際のデートバイオレンス・ハラスメント行動と関連するののかについて検討してみることにする。デートバイオレンス・ハラスメント尺度は、DV 認知というよりも客観的に行われた行動について評価するものであるため、神経質傾向と DV 認知の関連が実際の被害の度数や程度を反映しているのか、それとも反映していないのかについてこの分析によって調査することにする。

デートバイオレンス・ハラスメント尺度の得点と Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) の各尺度との相関係数を算出し、Table 16 にまとめた。これをみるといくつかの項目については、無相関検定で有意な相関が見られる。とくに協調性に関してはすべての項目で、それが高いほど、デートバイオレンス・ハラスメントの被害を受けるという一貫した傾向が見られる。これは、親切であることが被害に巻き込まれるリスクファクターである可能性を示していて、興味深い。しかし、神経質傾向は、間接的暴力、言語的暴力、性的暴力と有意な相関を持っているものの、相関係数は非常に低いものであり、意味のある結果が得られているとはいえない。つまり、実際に行われているデートバイオレンス・ハラスメント行為は、協調性に関する限定的な関係以外では、被害者のパーソナリティとはほとんど関連しないということがここからは導かれる。

Table 16 デートバイオレンス・ハラスメント尺度得点と 5 因子性格検査得点の相関

	外向性	協調性	勤勉性	神経質傾向	開放性
直接的暴力	.052*	.115**	.047*	-.008	.044
間接的暴力	.056*	.127**	.012	.059*	.068*
支配監視	.103**	.049*	.035	.036	.127*
言語的暴力	.037	.125**	-.011	.095**	.044
性的暴力	-.002	.120**	.028	.081**	.029
経済的暴力	.035	.091**	.036	.017	.053
つきまとい	.049	.137**	.056*	.014	.090**

注 1) ピアソンの相関係数と無相関検定

注 2) *p<.05; **p<.01

パーソナリティとデートバイオレンス認知の関連のまとめ

以上の結果から、次のような結果が示唆される。①実際に行われるデートバイオレンス・ハラスメントは被害者の神経質傾向とは関係していないものの、神経質傾向が高いものについては、その行為をより DV であると認知しやすい。②神経質傾向は男性よりも女性の方が高いために結果として、同じ行為であっても女性の方が、その行為を DV と認知しやすくなる。

3-4) 自尊心とデートバイオレンス認知の関連

自尊心の高さと DV 認知の関連についての仮説

DV 認知の性差についての検討として次に、自尊心に関する尺度との関連について分析する。自尊心が高いことは、一般にストレスフルな状況に対する耐性を作るために、同じデートバイオレンス・ハラスメント行為が行われても、それを DV であると認知しにくい可能性がある。逆に自尊心が低い場合にはちょっとした行為についても過度に傷つき、それを DV であると認知してしまう可能性がある。自尊心の性差については古くから多くの研究がある。その中には性差がないと報告するものもあるものの、近年の研究や近年のレビューなどを見てみると一般に男性の方が自尊心が高いという報告が多い (Skaalvik1, 1986; Martín-Albo, Núñez, Navarro, & Grijalvo, 2007; 吉村, 2017)、また、生物学的な性ではなく、男性性との相関があるとする研究もある (石田, 1994)。いずれにせよ、このような傾向が存在するとすれば、本研究で最初に指摘したような同じデートバイオレンス・ハラスメント行為を受けてもそれを DV であると認知しにくいという傾向は、そもそも自尊心の高さによって媒介されている可能性がある。そこで、次にこのような傾向について検討してみることにする。

自尊心尺度とその記述統計

本研究では、自尊心を測定するための尺度として、自尊心研究の中で最も良く使用され標準的になっている Rosenberg の自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) の日本語版である内田・上埜 (2010) による尺度と桜井 (2000) による尺度を元にして自尊心尺度の項目を構成した。

まず、念のため、この尺度の信頼性を検討するために因子数を 1 に固定した因子分析を行ったところ、因子抽出後の全分散の 40.25% が説明された。α 係数は 0.865 となった。そのため、この尺度は高い信頼性を持つ尺度であるといえる。

次に自尊心尺度の合計点について男女別に集計してみた。男性の平均点は 38.82 (9.609)、女性の平均点は 36.12 (10.737) [() 内は標準偏差] であった。性差について等分散を仮定しない t 検定を行ったところ、 $t(1776.280)=5.619$ で $p<.001$ で先行研究と同様に男性の得点の方が有意に高くなった。これは男性は自尊心が高いために DV を認知しにくく、その結果報告しにくい (自尊心が低いものが DV を認知、報告しやすい) という仮説とは整合するものである。

では、実際に DV を報告したものの自尊心は低いのだろうか、この点について、検討してみることにする。

自尊心の高さと DV 認知の関連についての分析

まず、身体的 DV についての分析結果を Table 17 にあげる。男女を込みにした分析では予想通り、DV を報告したもののほうが自尊心が低いという結果が得られている（ただし、 $p < .01$ ）が、男性では結果が逆になっており、仮説通りとはいえなかった。

次に、性的 DV についての分析結果を Table 18 にあげる。男女を込みにした分析では予想通り、DV を報告したもののほうが自尊心が低いという結果が得られているが、やはり、男性では結果が逆になっており、仮説通りとはいえなかった。

心理的 DV についての分析結果を Table 19 にあげる。男女を込みにした分析と女性については予想通り、DV を報告したもののほうが自尊心が低いという結果が得られている、男性でも同様のパターンは得られているが、有意差はなかった。

経済的 DV についての分析結果を Table 20 にあげる。男女を込みにした分析、男性、女性ともに DV を報告したものと報告していないものの自尊心の得点に有意な差は見られなかった。

Table 17 身体的 DV の認知と自尊心の関連

身体的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	36.02 (9.913) n=131	37.58 (10.297) n=1669	-1.672	p=0.095+
男性	39.28 (7.434) n=39	38.80 (9.698) n=861	.309	p=0.757ns
女性	34.64 (10.527) n=92	36.29 (10.754) n=808	-1.393	p=0.164ns

注) * $p < .05$; ** $p < .01$; ns not significant

Table 18 性的 DV の認知と自尊心の関連

性的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	35.10 (9.218) n=77	37.57 (10.309) n=1723	-2.065	p=0.039*
男性	39.37 (5.489) n=19	38.80 (9.680) n=881	.253	p=0.800ns
女性	33.71 (9.784) n=58	36.28 (10.785) n=842	-1.770	p=0.077+

注) * $p < .05$; ** $p < .01$; ns not significant

Table 19 心理的 DV の認知と自尊心の関連

心理的 DV	あり	なし	t 値	有意差
--------	----	----	-----	-----

男女込み	35.75 (10.788) n=273	37.77 (10.153) n=1527	-3.010	p=0.003**
男性	37.89 (8.906) n=99	38.93 (9.691) n=801	-1.018	p=0.309ns
女性	34.53 (11.573) n=174	36.50 (10.499) n=726	-2.178	p=0.030*

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

Table 20 経済的 DV の認知と自尊心の関連

心理的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	36.82 (10.146) n=108	37.51 (10.284) n=1692	-.671	p=0.502ns
男性	38.98 (8.399) n=54	38.81 (9.685) n=849	-.130	p=0.897ns
女性	34.67 (11.304) n=54	36.21 (10.700) n=846	-1.024	p=0.306ns

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

Table 21 デートバイオレンスの認知と自尊心の関連

デートバイオレンス	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	37.51 (9.948) n=113	37.46 (10.299) n=1687	-.049	p=0.961ns
男性	39.94 (7.272) n=52	38.75 (9.733) n=848	.0870	p=0.384ns
女性	35.44 (11.416) n=61	36.17 (10.692) n=839	-.508	p=0.611ns

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

最後にデートバイオレンス全体についての認知と自尊心の関連についての分析結果を Table 21 にあげる。男女を込みにした分析、男性、女性ともに DV を報告したものと報告していないものの自尊心の得点に有意な差は見られなかった。

デートバイオレンス・ハラスメント尺度と自尊心の関連についての分析

実際のデートバイオレンス・ハラスメント行動を示す尺度得点と自尊心の関連について相関を算出した。その結果、言語的、性的な DV との間にわずかな相関があったが、その値は非常にわずか

なものであった。自尊心とこれらの間には関連は見られないと考えて良いだろう。

Table 22 デートバイオレンス・ハラスメント尺度の得点と自尊心の関連

	直接的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
自尊心	.034ns	-.028ns	.009ns	-.087**	-.061*	-.007ns	.021ns

注) * $p < .05$; ** $p < .01$; ns not significant

自尊心とデートバイオレンスの関連のまとめ

自尊心の高さとデートバイオレンス認知が関係していて、自尊心が高い場合には、デートバイオレンス・ハラスメントに対してある程度の耐性があったり、対処可能であるためにデートバイオレンス認知が低下するという仮説、そして、その差が男女のデートバイオレンス認知の違いを作り出しているという仮説についてはデータを詳細に検討してみた結果、明らかにならなかった。ただし、少なくとも女性の場合、すべての集計において、DVを報告する人はしない人に比べて自尊心は低かったのがこの間にわずかながら関係がある可能性がある。しかし、統計的な有意差は検出されず、デートバイオレンス認知と自尊心を関連付けることは現状のデータからは、できないであろう。

3-5) 自己嫌悪とデートバイオレンス認知の関連

自己嫌悪とDV認知の関連についての仮説

自尊心は、自分に対するポジティブな認知のことであるが、その反対の概念としては、自己嫌悪感がある。ただし、自尊心が低いことがそのまま自己嫌悪を意味するわけではないため、ある程度は独立した概念であるとも考えられる。そこで、本研究では、自己嫌悪とDV認知の関連についても検討してみたいと思う。自己嫌悪が高いことが、自分に対して行われた行動をDVであると認知することを促進する可能性は存在するかもしれない。また、男性が女性よりも自尊心が高い裏返しとして女性の方が男性よりも自己嫌悪感が強いのであれば、DV認知の性差についても自己嫌悪感が関連している可能性がある。

自己嫌悪についての尺度とその記述統計

自己嫌悪についての尺度としては、宮下・小林(1981)による自己疎外感尺度の下位尺度の一つである自己嫌悪尺度を使用した。彼らの提唱した本来の尺度は、青年期の自己疎外感を測定するものであるが、孤独感、空虚感、圧迫感、自己嫌悪感の4つの下位尺度から構成されているので、この最後の尺度を使用するのである。この尺度は、「私は無用な人間だと思う」、「自分がどうなっても悲しむ人はいないだろう」などの5つの項目からなる。本研究では、これらの項目について、「ま

「まったくあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの7段階で評定させた。

まず、自己嫌悪感尺度を因子分析したところ、ひとつだけの因子が抽出された。因子抽出は全分散の 40.15 %をひとつの因子で説明することができた。α係数は、0.758 であった。まず、この尺度の性差について分析した。その結果、男性の平均は 19.63 (5.222) [() 内は標準偏差]、女性の平均は 20.33 (5.905) となり、この差を t 検定したところ、 $t(1798)=-2.668, p=0.008$ で 1 %水準で有意な差が見られ、予想通り、女性の得点が高くなった。ちなみに自尊心との相関係数は、 $r=-0.809$ で $p<.001$ でこれも高い水準で有意になった。

自己嫌悪の高さと DV 認知の関連についての分析

分析の結果の要約を以下の Table23 ~ 27 に示す。身体的 DV、性的 DV、心理的 DV、経済的 DV それにデートバイオレンス自体に関する認知について、それぞれの DV の被害を受けているとしたものと被害を受けていないとしたものの間の自己嫌悪感尺度の得点には一部のものを除き、差が見られなかった。これは男女を込みにした分析においても、男女を別々に集計したものであっても変わらなかった。全体的な傾向として DV 認知と自己嫌悪感には関連がないといつてよいと思われる。つまり、自己嫌悪感が高いものが DV 被害者であると認知しやすい傾向はほぼ存在しないと思われる。

Table 23 身体的 DV の認知と自己嫌悪感の関連

身体的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	21.08 (6.147) n=131	19.90 (5.530) n=1669	2.345	p=0.019*
男性	19.77 (5.387) n=39	19.63 (5.217) n=861	0.166	p=0.868ns
女性	21.64 (6.388) n=92	20.19 (5.834) n=808	2.245	p=0.025*

注) * $p<.05$; ** $p<.01$; ns not significant

Table 24 性的 DV の認知と自己嫌悪感の関連

性的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	21.55 (6.017) n=77	19.91 (5.555) n=1723	2.512	p=0.012*
男性	20.74 (5.425) n=19	19.61 (5.218) n=881	0.931	p=0.352ns
女性	21.81 (6.220) n=58	20.23 (5.873) n=842	1.971	p=0.049*

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

Table 25 心理的 DV の認知と自己嫌悪感の関連

心理的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	20.70 (6.174) n=273	19.86 (5.464) n=1527	2.302	p=0.021*
男性	19.66 (5.414) n=99	19.63 (5.201) n=801	0.047	p=0.963ns
女性	21.29 (6.507) n=174	20.10 (5.733) n=726	2.390	p=0.017*

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

Table 26 経済的 DV の認知と自己嫌悪感の関連

経済的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	20.61 (5.989) n=108	19.94 (5.556) n=1692	1.204	p=0.229ns
男性	20.00 (5.539) n=54	19.61 (5.203) n=849	0.532	p=0.595ns
女性	21.22 (6.401) n=54	20.28 (5.872) n=846	1.140	p=0.255ns

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

Table 27 デートバイオレンスの認知と自己嫌悪感の関連

デートバイオレンス	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	20.66 (5.896) n=113	19.94 (5.561) n=1687	1.337	p=0.181ns
男性	19.50 (5.101) n=52	19.64 (5.232) n=848	-0.190	p=0.850ns
女性	21.66 (6.372) n=61	20.24 (5.862) n=839	1.812	p=0.070+

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

デートバイオレンス・ハラスメント尺度と自己嫌悪感の関連についての分析

デートバイオレンス・ハラスメント尺度と自己嫌悪感尺度との関連について相関係数を算出したものを以下の Table 28 にあげる。相関係数自体はそれほど大きくないもののすべてで有意な相関

が検出されている。これは客観的なデートバイオレンス・ハラスメント行動と自己嫌悪感に正の関連があることを示している。つまり、自己嫌悪感、DV 認知とは関連しないが、客観的なバイオレンス行動とは関連している可能性がある。ただし、この研究データからは因果関係は明らかにならない。つまり、自己嫌悪感が高いものがデートバイオレンス・ハラスメント行動を高く評定しやすいのか、デートバイオレンス・ハラスメントを受けると自己嫌悪感が高くなるのかについては明らかにならない。

Table 28 デートバイオレンス・ハラスメント尺度の得点と自己嫌悪感の関連

	直接的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
自己嫌悪	.087**	.109**	.081*	.149**	.138**	.069*	.078*

注) * $p < .05$; ** $p < .01$

自己嫌悪感とデートバイオレンスの関連のまとめ

本項の分析により、以下のことが示された。① DV 認知と自己嫌悪感にはほとんど関連は見られない。自己嫌悪感が高いからといって、DV を報告しやすいことはない。②これは男女ともに見られる傾向である。③デートバイオレンス・ハラスメントの頻度と自己嫌悪感には有意な相関が見られるが、これは自己嫌悪感が高いものがデートバイオレンス・ハラスメントを認知しやすいのか、それとも、デートバイオレンス・ハラスメントを受けているものの自己嫌悪感が上昇する傾向にあるのかどちらかは不明である。

3-6) 自己主張性とデートバイオレンス認知の関連

自己主張性と DV 認知についての仮説

自己主張は、自分の意見や考えを他の人の意見に迎合することなく主張する主体的な行動をする傾向のことである。この個人差と DV 認知には関連がある可能性がある。つまり、自己主張性が高い場合には自らに対する DV を積極的に認知し、告発していくと考えることができるからである。自己主張性は男性の方が女性よりも高い可能性が大きい。とすると、男性の方がより DV 認知を行うことになると考えられる。これはデータとは矛盾している可能性もある。そこで、この問題について実証的に検討してみる。

自己主張性尺度についての尺度とその記述統計

自己主張の個人差を測定する尺度にはいくつかあるが、その中で比較的良好に使われているのは、Raskin ら (Raskin, & Hall, 1979; Raskin, Novacek, & Hogan 1991) によって開発された自己愛尺度

(NPI:A narcissistic personality inventory) の下位尺度である「自己主張性尺度」である。自己愛尺度は、自己主張性以外には、「優越感・有能感」尺度と「注目賞賛欲求」尺度からなっている。幸いなことに NPI は日本語版も何人かの研究者によって開発されている。ここでは、小塩 (1998) の NPI 日本版を元にした自己主張性尺度の下位尺度を使用して研究を行ってみることにしたい。なお、評定は本研究のほかの尺度と同様 7 段階で行った。

まず最初に自己主張性尺度の信頼性を調べるために、因子数を 1 に固定して因子分析を行った。その結果、因子抽出後の分散の 33.929% を第 1 因子のみで説明することができた。また、 α 係数は 0.834 となった。因子数を固定しないで因子分析を行ったところ、6 項目から構成される第 1 因子と 4 項目から構成される第 2 因子にわかれ、第 2 因子までで、全分散の 38.644 % を説明することができた。しかし、本研究では従来の研究との整合性を考え、2 つの因子からなる尺度ではなく、自己主張性を 1 つの尺度として扱うことにした。

次に、自己主張性尺度の性差について検討した。男性の平均値は、40.33 (9.034)、女性の平均値は、38.44 (9.484) [() 内は標準偏差] で、この差について t 検定したところ、 $t(1798)=4.321, p \div 0.000$ で予想通り男性の方が有意に高い得点であった。

自己主張性と DV 認知の関連についての分析

分析の結果の要約を以下の Table に示す。身体的 DV、性的 DV、心理的 DV、経済的 DV それにデートバイオレンス自体に関する認知について、それぞれの DV の被害を受けているとしたものと被害を受けていないとしたものの間の自己主張性尺度の得点には一部のものを除き、差が見られなかった。これは男女を込みにした分析においても、男女を別々に集計したものであっても変わらなかった。全体的な傾向として DV 認知と自己主張性には関連がないといつてよいと思われる。つまり、自己主張性が高いものが DV 被害者であると認知したり、報告したりしやすい傾向はほぼ存在しないと思われる。

Table 29 身体的 DV の認知と自己主張性の関連

身体的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	40.33 (9.420) n=131	39.31 (9.298) n=1669	1.205	p=0.228ns
男性	40.69 (9.370) n=39	40.31 (9.024) n=861	0.257	p=0.797ns
女性	40.17 (9.488) n=92	38.24 (9.470) n=808	1.852	p=0.064+

注) * $p < .05$; ** $p < .01$; ns not significant

Table 30 性的 DV の認知と自己主張性の関連

性的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	39.45 (10.370) n=77	39.38 (9.261) n=1723	0.068	p=0.946ns
男性	42.84 (12.885) n=19	40.27 (8.936) n=881	1.226	p=0.229ns
女性	38.34 (9.267) n=58	38.45 (9.505) n=842	-0.080	p=0.936ns

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

Table 31 心理的 DV の認知と自己主張性の関連

心理的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	40.31 (10.057) n=273	39.22 (9.161) n=1527	1.788	p=0.074+
男性	41.87 (9.931) n=99	40.14 (8.906) n=801	1.801	p=0.072+
女性	39.43 (10.049) n=174	38.21 (9.336) n=726	1.525	p=0.128ns

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

Table 32 経済的 DV の認知と自己主張性の関連

経済的 DV	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	40.23 (10.440) n=108	39.33 (9.231) n=1692	0.972	p=0.329ns
男性	41.67 (11.297) n=54	40.24 (8.872) n=849	1.123	p=0.262ns
女性	38.80 (9.393) n=54	38.42 (9.495) n=846	0.284	p=0.777ns

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

Table 33 デートバイオレンスの認知と自己主張性の関連

デートバイオレンス	あり	なし	t 値	有意差
男女込み	41.09 (9.707) n=113	39.27 (9.272) n=1687	2.012	p=0.044*
男性	42.27 (9.431) n=52	40.21 (9.002) n=848	1.598	p=0.110ns
女性	40.08 (9.902)	38.32 (9.448)	1.400	p=0.162ns

n=61

n=839

注) *p<.05; **p<.01; ns not significant

デートバイオレンス・ハラスメント尺度と自己主張性の関連についての分析

デートバイオレンス・ハラスメント尺度と自己主張性尺度との関連について相関係数を算出したものを以下の Table 34 にあげる。相関係数自体はそれほど大きくないもののすべてで有意な相関が検出されている。これは客観的なデートバイオレンス・ハラスメント行動と自己主張性に正の関連があることを示している。つまり、自己主張性は、DV 認知とは関連しないが、客観的なバイオレンス行動とは関連している可能性がある。ただし、この研究データからは因果関係は明らかにならない。つまり、自己主張性が高いものがデートバイオレンス・ハラスメント行動の存在を評定しやすいのか、デートバイオレンス・ハラスメントを受けると自己主張性が高くなるのかについては明らかにならない。

Table 34 デートバイオレンス・ハラスメント尺度の得点と自己主張性の関連

	直接的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
自己主張性	.098**	.092**	.118**	.084**	.052*	.079**	.086**

注) *p<.05; **p<.01

自己主張性とデートバイオレンスの関連のまとめ

本項の分析により、以下のことが示された。① DV 認知と自己主張性にはほとんど関連は見られない。自己主張性が高いからといって、DV を報告しやすいことはない。②これは男女ともに見られる傾向である。③デートバイオレンス・ハラスメントの頻度と自己主張性には有意な相関が見られるが、これは自己主張性が高いものがデートバイオレンス・ハラスメントを認知しやすいのか、それとも、デートバイオレンス・ハラスメントを受けているものの自己主張性が上昇する傾向にあるのかどちらかは不明である。

3-7) 伝統的な男性役割態度尺度とデートバイオレンス認知の関連

伝統的な男性役割態度尺度とその性差

伝統的な男性役割態度とは、タフネス、地位志向、女性的な行動・態度の否定、攻撃性、強い達成欲求、性的活動性など、伝統的に男性特有の行動だといわれてきた態度特徴である。この特徴については、いままでもさまざまな研究が行われてきており、デートバイオレンス・ハラスメント

とも関連があると指摘されている。たとえば、男性の女性への暴力 (Moore, & Stuart, 2005; 越智・喜入・甲斐・長沼, 2015)、セクシャルハラスメント (Mellon, 2013) などである。これらはいずれも加害者属性との関連であるが、男性の被害者がこのような態度を持っていた場合、同じ程度の暴力を受けても、それを被害と認識することは自らの男性性と矛盾することになるため、その行動を DV と認識しない可能性がある。そこで、ここでは、伝統的な男性役割態度と DV 認知の関連について調査してみることにした。伝統的な男性役割態度尺度としては、日本人を対象にしてオリジナルに構成された渡邊(2017)の尺度を用いることにした。この尺度は、「社会的地位の高さ」、「精神的・肉体的な強さ」、「作動性の高さ」、「女性の言動の回避」、「女性の優越性」の5つの因子からなるが、ここでは女性性の回避というよりは男性性の協調に関係する最初の3つの尺度を使用することにした。社会的地位の高さ尺度は、「仕事で成功することは男性の人生における中心的な目標だ」などの項目から、精神的肉体的強さ尺度は「男性は公の場では決して泣いてはいけない」などの項目から、作動性の高さ尺度は「男性は他者に対して自分の意見をきちんと主張しなければならない」などの項目から構成される。

これらの尺度は、男性の方が女性よりも高い得点であることが渡邊(2017)によって指摘されているが、本研究においてもまず、性差が存在するかどうかについて検討してみた。その結果を以下の Table に示す。仮説どおり、すべての尺度について男性の方が女性よりも得点が有意に高かった。

Table 35 伝統的な男性役割態度尺度の性差

	男性	女性	t 値	有意差
社会的地位	16.09 (4.977)	15.23 (5.099)	3.588	p ≙ 0.000**
精神肉体強さ	15.55 (4.783)	12.50 (4.786)	13.537	p ≙ 0.000**
作動性	16.55 (4.913)	14.38 (5.027)	9.233	p ≙ 0.000**

合計	48.18 (13.230)	42.12 (13.419)	9.662	p ≙ 0.000**

注) () 内は標準偏差

伝統的な男性役割態度尺度と DV 認知の関連についての分析

次に身体的、性的、心理的、経済的、そして、デートバイオレンスについての DV 認知の有無によって伝統的な男性役割態度尺度に差があるかを検討した。結果を以下の Table 36 に示す。興味深いことにすべての項目において有意な差は検出されなかった。つまり、伝統的な男性役割態度は DV 認知とは関係していないということがわかった。

Table 36 各 DV の有無と男性役割態度の関連

身体的 DV	あり	なし	有意差
人数	131	1669	

社会的地位	15.84	15.64	ns
精神肉体強さ	13.92	14.03	ns
作動性	15.27	15.48	ns
伝統的男性性	45.08	45.16	ns
性的 DV	あり	なし	有意差
人数	77	1723	
社会的地位	15.56	15.66	ns
精神肉体強さ	13.90	14.03	ns
作動性	15.01	15.49	ns
伝統的男性性	44.47	45.18	ns
心理的 DV	あり	なし	有意差
人数	273	1527	
社会的地位	15.73	15.65	ns
精神肉体強さ	13.75	14.07	ns
作動性	15.45	15.47	ns
伝統的男性性	44.93	45.19	ns
経済的 DV	あり	なし	有意差
人数	108	1692	
社会的地位	16.25	15.62	ns
精神肉体強さ	14.58	13.99	ns
作動性	15.81	15.44	ns
伝統的男性性	46.64	45.06	ns
デートバイオレンス	あり	なし	有意差
人数	113	1687	
社会的地位	15.36	15.68	ns
精神肉体強さ	13.46	14.06	ns
作動性	15.14	15.49	ns
伝統的男性性	43.96	45.23	ns

注) * $p < .05$; ** $p < .01$; ns not significant

デートバイオレンス・ハラスメント尺度の得点と伝統的な男性役割態度尺度の関連

次にデートバイオレンス・ハラスメント尺度と伝統的な男性役割態度尺度の相関を算出した。そ

の結果、全体的に相関係数は非常に低いものとなったが、無相関検定においては、多くの項目が有意となった。興味深いのは、当初の仮説は、伝統的男性役割態度は DV 認知を抑制する方向に働くであろうというものであったのに対して(その場合、相関係数はマイナスになることが予想される)、この結果においてはすべての相関係数がプラス、つまりデートバイオレンス・ハラスメントを受けている方が伝統的な男性役割態度尺度が高いという結果になった点である。ただし、そもそも全体的に相関係数が低かったことから、これらの関係について詳細に検討する必要はないように思われる。

Table 37 デートバイオレンス・ハラスメント尺度得点と男性役割態度の相関

	社会的地位	精神肉体強さ	作動性	男性役割合計
直接的暴力	.076**	.152**	.078**	.113**
間接的暴力	.074**	.112**	.048*	.086**
支配監視	.086**	.098**	.081**	.098**
言語的暴力	.087**	.078**	.045ns	.078**
性的暴力	.059*	.037ns	.020ns	.043ns
経済的暴力	.072**	.124**	.069**	.098**
つきまとい	.066**	.137**	.063**	.098**

注 1) ピアソンの相関係数と無相関検定

注 2) * $p < .05$; ** $p < .01$

伝統的な男性役割態度とデートバイオレンスの関連のまとめ

当初の仮説では、伝統的な男性役割を持っているものは、同じ程度のバイオレンス・ハラスメントを受けてもそれをデートバイオレンス・ハラスメントだと認識しないと思われたが、実際に DV 認知がある場合とない場合で、伝統的な男性役割態度に違いはなかった。また、デートバイオレンス・ハラスメント行動とこれらの尺度の間には相関はあったもののその相関係数は低く、意味のある関係があるとはいえなかった。つまり、伝統的男性役割態度とデートバイオレンス・ハラスメントの間に関係は見られなかった。

3-8) 恐怖や不安感情とデートバイオレンス認知の関連

恐怖、不安感情とデートバイオレンス・ハラスメント認知の関連

デートバイオレンス・ハラスメント認知に関連する要因のひとつとして、それぞれのデートバイオレンス・ハラスメント行為を受けた場合に感じる恐怖や不安がある可能性がある。例えば、同じ

暴力を受けた場合でも、男性と女性では感じる恐怖感や不安感が異なると思われる。一般的には男性の方が力が強いので、恐怖感や不安感は少ないだろう。そこで、DV 認知をした対象者の恐怖と不安の度合いに差があるかどうかについて検討してみることにした。

身体的 DV の認知と恐怖・不安感情の関連

身体的 DV を受けたと認知している男性と女性について、彼らがそのときに感じた恐怖や不安の程度を 7 段階で評定したものについて Table 38 にまとめた。行為としては、直接的暴力と間接的暴力について分析した。検定の結果、恐怖感については男女で有意な差は見られず、不安感については女性の方が有意に高くなった。

Table 38 身体的 DV を受けた対象者における恐怖と不安

身体的 DV	男性	女性	有意差
恐怖			
直接的暴力	4.65 (1.932) [37]	4.91 (1.754) [88]	ns
間接的暴力	4.41 (1.907) [37]	4.79 (1.558) [86]	ns
不安			
直接的暴力	4.73 (1.790) [37]	5.51 (1.688) [88]	0.022
間接的暴力	4.27 (1.851) [37]	5.12 (1.560) [86]	0.010

注 1) () 内は標準偏差

注 2) []内は人数

性的 DV の認知と恐怖・不安感情の関連

性的 DV を受けたと認知している男性と女性について、彼らがそのときに感じた恐怖や不安の程度を 7 段階で評定したものについて Table 39 にまとめた。検定の結果、恐怖感、不安感とも男女で有意な差は見られなかった。

Table 39 性的 DV を受けた対象者における恐怖と不安

性的 DV	男性	女性	有意差
恐怖			
性的暴力	4.35 (1.801) [17]	4.07 (1.923) [55]	ns
不安			
性的暴力	4.35 (1.766) [17]	4.67 (1.816) [55]	ns

注1) ()内は標準偏差

注2) []内は人数

心理的 DV の認知と恐怖・不安感情の関連

心理的 DV を受けたと認知している男性と女性について、彼らがそのときに感じた恐怖や不安の程度を7段階で評定したものについて Table 40 にまとめた。行為としては、間接的暴力、支配監視、言語的暴力、つきまとい・ストーキングについて分析した。検定の結果、恐怖感については間接的暴力、言語的暴力で差が見られ、不安感については間接的暴力で差が見られ、いずれも、女性の方が有意に高くなった。

Table 40 心理的 DV を受けた対象者における恐怖と不安

心理的 DV	男性	女性	有意差
恐怖			
間接的暴力	3.76 (1.836) [82]	4.65 (1.572) [141]	0.000
支配監視	3.36 (1.975) [85]	3.34 (1.860) [150]	ns
言語的暴力	3.01 (1.962) [87]	3.79 (2.013) [160]	0.004
つきまとい	3.53 (1.977) [88]	3.60 (1.949) [145]	ns
不安			
間接的暴力	3.98 (1.892) [82]	5.12 (1.574) [141]	0.000
支配監視	3.75 (1.825) [85]	3.91 (1.963) [150]	ns
言語的暴力	3.47 (1.928) [87]	3.79 (2.013) [160]	ns
つきまとい	3.59 (2.015) [88]	3.90 (1.930) [145]	ns

注1) ()内は標準偏差

注2) []内は人数

経済的 DV の認知と恐怖・不安感情の関連

経済的 DV を受けたと認知している男性と女性について、彼らがそのときに感じた恐怖や不安の程度を7段階で評定したものについて Table にまとめた。検定の結果、恐怖感、不安感とも男女で有意な差は見られなかった。

Table 41 経済的 DV を受けた対象者における恐怖と不安

経済的 DV	男性	女性	有意差
恐怖			
経済的暴力	3.31 (2.331) [52]	3.26 (2.016) [47]	ns

不安 経済的暴力	3.96 (2.331) [52]	4.28 (2.113) [47]	ns
-------------	-------------------	-------------------	----

注1) ()内は標準偏差

注2) []内は人数

恐怖、不安感情とデートバイオレンス・ハラスメント認知の関連のまとめ

ここでは、DV 認知がなされた場合の男女の恐怖、不安感情について検討した。分析の結果、多くの項目で男女差が検出されなかった。一般には、DV 認知が生じた場合、女性の方がより恐怖や不安を感じると考えられるが、この調査結果はそうになっていなかった。特に興味深いのは直接的な暴力においてもその恐怖感には男女差が存在していないことである。男女の力の差などを考えるとこれは教務深いことであると思われる。逆に性的、心理的、経済的な虐待に関しては、男女差が生じない可能性があると思われたが、実際には、間接的な暴力について女性が男性よりも不安や恐怖を感じやすいということがわかった。全体的にいえるのは、デートバイオレンス・ハラスメントだと認知される行為が行われた場合、男性と女性が感じている恐怖や不安は同程度であり、ただし、間接的な暴力については女性が男性よりも恐怖や不安を感じやすかった。

4. 研究のまとめ

本研究では、デートバイオレンス・ハラスメントの認知に関して、男性と女性に違いがあり、男性は、女性に比べて DV 認知が抑制されている可能性があるという点について明らかにするとともに、そのプロセスに影響している要因を明らかにすることを目的として行われた。その結果、以下のことがあきらかになった。

① DV 調査においては質問形式が結果を大きく左右する。DV があつたかどうかを直接聞く場合と DV の程度や頻度について具体的に質問していく場合には、その性差やパターンが大きく異なってしまう。②一般に DV の有無について直接質問すると、女性のほうが男性よりもより被害に遭っているような結果となるが、DV の程度や頻度について具体的に質問していくと、その男女差は消失するか、場合によっては男性のほうが多くの被害を受けているという結果となる。③実際に受けている DV の度合いとそれが DV であると認知する程度は男性よりも女性のほうが高く関連している。④一般に同じ程度の DV を受けていてもそれを DV であると認知する閾値は女性よりも男性のほうが高い。ただし、性的虐待に関してはこの関係が逆になる。⑤身体的 DV は女性の場合、直接的暴力よりも間接的な暴力と関連する。⑥身体的 DV は、男性被害者の場合、身体的 DV には支配監視暴力が含まれる。⑦性的 DV は女性の場合、直接的暴力とも関連する。つまり、男性の直接的暴力は性的なものに関連する場合がある。⑧心理的 DV の認知を構成するのは支配監視と言語的暴力、女性被害者の場合、それに加えて間接的な暴力であり、つきまとい・ストーキングは男女とも関連しない。⑨経済的 DV 認知に関しては経済的暴力とほぼそのまま関連している。⑩デートバイオレン

スについての認知はすべてのタイプの暴力と関連しているのではなく、支配監視や言語的暴力と関連していた。これは「デートバイオレンス」という言葉が直接的な暴力よりも心理的な暴力に近いイメージを持っていることを示している。⑪実際に行われるデートバイオレンス・ハラスメントは被害者の神経質傾向とは関係していないものの、神経質傾向が高いものについては、その行為をよりDVであると認知しやすい。⑫神経質傾向は男性よりも女性の方が高いために結果として、同じ行為であっても女性の方が、その行為をDVと認知しやすくなる。⑬自尊心の高さとデートバイオレンス認知が関係していて、自尊心が高い場合には、デートバイオレンス・ハラスメントに対してある程度の耐性があったり、対処可能であるためにデートバイオレンス認知が低下するという仮説、そして、その差が男女のデートバイオレンス認知の違いを作り出しているという仮説については、明らかにならなかった。⑭DV認知と自己嫌悪感にはほとんど関連は見られない。自己嫌悪感が高いからといって、DVを報告しやすいことはない。これは男女ともに見られる傾向である。⑮デートバイオレンス・ハラスメントの頻度と自己嫌悪感には有意な相関が見られるが、これは自己嫌悪感が高いものがデートバイオレンス・ハラスメントを認知しやすいのか、それとも、デートバイオレンス・ハラスメントを受けているものの自己嫌悪感が上昇する傾向にあるのかどちらかは不明である。⑯DV認知と自己主張性にはほとんど関連は見られない。自己主張性が高いからといって、DVを報告しやすいことはない。これは男女ともに見られる傾向である。⑰デートバイオレンス・ハラスメントの頻度と自己主張性には有意な相関が見られるが、これは自己主張性が高いものがデートバイオレンス・ハラスメントを認知しやすいのか、それとも、デートバイオレンス・ハラスメントを受けているものの自己主張性が上昇する傾向にあるのかどちらかは不明である。⑱伝統的な男性役割を持っているものは、同じ程度のバイオレンス・ハラスメントを受けてもそれをデートバイオレンス・ハラスメントだと認識しないと思われたが、実際にDV認知がある場合とない場合で、伝統的な男性役割態度に違いはなかった。⑲デートバイオレンス・ハラスメント行動と男性役割態度尺度の間には相関はあったもののその相関係数は低く、意味のある関係があるとはいえなかった。⑳DV認知がなされた場合の男女の恐怖、不安感情について明確な男女差は検出されなかった。㉑ただし、間接的な暴力について女性が男性よりも不安や恐怖を感じやすいということがわかった。

まとめてみると、実際に行われているデートバイオレンス・ハラスメントの程度については、性差は存在しないにもかかわらず、直接的なDV認知においては男性の方がそれを報告しにくいという事実が確認された。その原因としては、性格特性、自尊心、自己嫌悪感、自己主張性、伝統的な男性役割、DV時における恐怖感、不安感の男女差などはデートバイオレンス・ハラスメントの種類によっては若干の影響は及ぼしているものの決定的な影響を及ぼしているとはいえなかった。デートバイオレンス・ハラスメント行為からそれをDVであると認知するプロセスの性差については今後も引き続き検討していくことが必要であると思われる。

引用文献

- 1) 石田英子. (1994). ジェンダ・スキーマの認知相関指標における妥当性の検証. 心理学研究, 64 (6), 417-425.
- 2) Mellon, R. C. (2013). On the motivation of quid quo sexual harassment in men: Relation to masculine gender role stress. *Journal of Applied Social Psychology*, 43, 2287– 2296.
- 3) Moore, T. M., & Stuart, G. L. (2005). A review of the literature on masculinity and partner violence. *Psychology of Men & Masculinity*, 6, 46– 61.
- 4) 宮下一博, & 小林利宣. (1981). 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係. 教育心理学研究, 29(4), 297-305.
- 5) 越智啓太, 長沼里美, 甲斐恵利奈. (2014). 大学生に対するデートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成. 法政大学文学部紀要, 69, 63-74.
- 6) 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 長沼里美 (2015). 女性蔑視的態度がデートハラスメントに及ぼす効果 法政大学文学部紀要, 70, 101-110.
- 7) 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2015). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (1) –被害に焦点を当てた分析– 法政大学文学部紀要, 71,135-147.
- 8) 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2016). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (2) –加害に焦点を当てた分析– 法政大学文学部紀要, 72, 161-171.
- 9) 越智啓太, 甲斐恵利奈, 喜入暁, 長沼里美 (2016). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (3) –恋愛行動パターンとDVの関連– 法政大学文学部紀要, 73, 109-126.
- 10) 小塩真司. (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. 教育心理学研究, 46(3), 280-290.
- 11) 小塩真司, & 阿部晋吾. (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, 21(1), 40-52.
- 12) Raskin, R., & Hall, C. S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*,45, 590.
- 13) Raskin, R., Novacek, J., & Hogan R. 1991 Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality*, 59, 19-38.
- 14) Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent selfimage*. Princeton University Press.
- 15) 静岡市(2013). 男女間における暴力に関する調査報告書 静岡市生活文化局市民生活部男女参画・市民協働推進課
- 16) Skaalvik1, E. M. (1986). Sex differences in global self - esteem. A research review. *Scandinavian Journal of Educationl Research*, 30 (4), 167-179.
- 17) 桜井茂男. (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 18) 吉村健. (2017). 大学生の自尊感情におけるジェンダー・アイデンティティの影響. 教育実践研究紀要,17, 125-135.

- 1 9) Martín-Albo, J., Núñez, J. L., Navarro, J. G., & Grijalvo, F. (2007). The Rosenberg Self-Esteem Scale: translation and validation in university students. *The Spanish journal of psychology*, 10(2), 458-467.
- 2 0) 内閣府(2015) 男女間における暴力に関する調査(平成26年度調査)内閣府男女共同参画局
- 2 1) 内閣府(2018) 男女間における暴力に関する調査(平成29年度調査)内閣府男女共同参画局
- 2 2) 内田知宏, & 上埜高志. (2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 58(2), 257-266.
- 2 3) 渡邊寛. (2017). 伝統的な男性役割態度尺度の作成と信頼性・妥当性の検証. *心理学研究*, 88(5), 488-498.
- 2 4) 横浜市(2008). デートDVについての意識・実態調査報告書 横浜市市民活力推進局